

被災地で感じた人々の想い

私は今回、2度目となる被災地巡検に参加した。昨年、私は巡検を経て価値観が変わり、震災や防災への関心が高まった。まずは昨年の巡検から今日までの活動や思いについて少し書こうと思う。

昨年の巡検では本当に大きな衝撃を受けた。そしてその後、私もこの震災についてや防災の大切さを誰かに伝えたい、伝えなくてはならないと考えるようになった。そこで私は防災班に入り、新潟県生徒会連盟として防災の開発活動を行った。7月には防災班のチーフとなり、より活動に励むようになった。活動していく中で新たに学んだことは数えきれない。達成感を感じることもあれば悔しさやもどかしさを感じたこともあった。しかしこれまでのたくさんの困難も、昨年の巡検で感じた使命感のおかげで乗り越えられたと思う。

さて、今回の巡検に参加するにあたり、前回とは異なった目線で学ぶため、事前にあることを行った。それは事前学習の一環として、3月11日に放送された東日本大震災についてのニュースやドキュメンタリーを見たことだ。これらの番組内で多くの人が口にしてきた言葉がある。それは「15年経つ中で心境に変化があった」ということだ。私はこの言葉が心に残り、今回の巡検では特に人々の気持ちや心情に着目することにした。

今回の巡検で私が訪れた震災遺構や伝承館のうち、石巻市震災遺構門脇小学校、NHK仙台放送局、山元町震災遺構中浜小学校は、昨年に行っていない初めて訪問する場所だ。

石巻市震災遺構門脇小学校では、避難訓練の重要性について改めて認識することができた。震災発生時、停電が起きたため校内放送が使えなかった。また、机を後ろに下げている教室があったり、掃除をされていて先生のいない特別教室にいた児童もいた。このように避難訓練とは異なった状況で震災が発生したのだ。

しかし震災発生時に門脇小学校にいた児童は全員が助かっている。先生方や児童の行動が命を救うことに繋がったのだが、そのような行動ができたのはやはり日頃の避難訓練によるものだろう。門脇小学校では校庭に出た後、裏山まで登るような避難訓練を行っていたそうだ。これにより震災時も裏山に逃げるといった判断がすぐに行われ、結果的に児童、教職員だけでなく地域住民を救うことにも繋がった。児童らが山へ逃げているのを見て危機感を感じ、自分も山へ避難しようとした住民が多くいたそうだ。これらのことから、事前準備の大切さ、そして自分が逃げることで誰かを助けることに繋がるということも学ぶことができた。これらの学びを明訓の今後の避難訓練にも活かしていきたい。

続いて NHK 仙台放送局についてだ。ここでは NHK が行った被災地に定点カメラを置くというプロジェクトで撮影された映像を見ることができた。この映像では復興していく町の様子が映されていた。しかし私の心に残っているのは現状復興することができない町の様子だ。それらは原発事故の影響で人が帰ることが難しい町だ。映像のなかではただ時間だけが過ぎていた。ここが故郷である方々はどんなに辛く苦しい思いをしているのだろうと考えずにはいられなかった。

山元町震災遺構中浜小学校を訪れたとき、案内をしてくださった方から最初に言われたのは、津波が来た場合はバスに乗って遠くへ逃げるとのことだ。私はそこでいつ震災が起きてもおかしくないのだということを改めて実感した。これほど防災について学んできたはずなのに、やはりどこかで、今災害が起きるはずはないと考えてしまっていたのだ。

中浜小学校では実際に児童や教職員、地域の方が避難していた屋上の倉庫を見ることができた。倉庫の中は、昼間だったのにも関わらずとても暗かった。また、訪れた時の気温は 10 度ほどあったが、それでもとても寒く感じた。雪が降っており、家族の安否もわからず、目の前に津波が押し寄せている状況でこの倉庫に避難していた人はどれほどの恐ろしさを感じていたのだろうと考えてしまった。

ここからは人々の「想い」に着目したうえで感じたことを書いていこうと思う。

まずは石巻市立大川小学校で感じたことについてだ。

「ここは『未来を拓く』大川小学校」である。昨年と同様に語り部の佐藤さんが強調しておっしゃっていた言葉だ。私はこの意味を今回ようやく理解できたように思う。大川小学校に行き、お話を聞き、最初に感じてしまうのはやはりその残酷さや悲しみなどだろう。そこで起きた悲惨な出来事にただただ衝撃を受け、悲しむことばかりになってしまう。私もそうだった。



しかし、今回二度目の訪問で新たに考えたことがある。未来は変えることができるということだ。過去に起きた出来事を変えることは不可能である。でもこれから起きる災害に備え、二度と同様の出来事を起こさないように対策をすることはできる。大川小学校で起きたことに向き合い、その教訓をこれからの未来に活かすことこそが「未来を拓く」の意味なのかもしれないと考えることができた。そして、佐藤さんを含む私たちに大川小学校について伝えてくださっている方々もそのように考えてくださっているのではないかと思った。過去の震災や出来事に向き合うこと、そのこ

とについて話すのは決して簡単なことではないと思う。それでも私たちに伝えてくださる意味を考えなくてはならない。私は今回ようやく「未来を拓く」の意味を理解することができた。

続いて石巻市震災遺構門脇小学校で感じたことについてだ。

門脇小学校の中には「がんばろう！石巻」と書かれた木製の看板が展示されていた。実はこの地域には東日本大震災よりも昔に起きていた地震や津波について記した石碑があったそうだ。しかし地域の人々にきくとそれは風景の一部になっていたそうだ。石碑は手入れをしなくてもずっと残り続ける。残り続けるからこそ先人たちは自然災害伝承碑というものを作ってくれたのかもしれない。しかしそれでは風化してしまうと考えた地域の人々はあえて木製の看板を作り、5年に1度作り替えることにしたのだそうだ。これから何が起きたとしても必ず未来の命を守るという人々の強く大きな想いが表れていると感じた。



また、門脇小学校の前にはイチョウの木が立っていた。真ん中の幹は焼け焦げて途中でなくなってしまう。しかしその周りには新しい幹が何本も生えていた。津波と火災の被害に遭っても根は生き続けていたのだ。私にはこの木にも地域の方々の枯れない強い想いが表れているように感じられた。

次に NHK 仙台放送局でみた展示についてだ。

その展示では被災者の方々の声を私たちに届けてくれるものだった。私はあるバレリーナの方のお話が心に残っている。その方は地元でバレエ教室を開くという夢があったそうだ。しかし地元は被災してしまい、夢の実現は難しいと思われた。それでもその方は夢を叶えて地元でバレエ教室を開くことができたそうだ。きっと実現までの道のりは平坦なものではなかっただろう。被災した中でも希望を見だし、努力をし続けたその方のことを思い感動してしまった。それと同時に、私も頑張らなくてはならないと感じずにはいられなかった。

続いて名取市震災復興伝承館での語り部の方のお話について書きたいと思う。

ここでお話をしてくださった語り部の方は去年と同じ方だった。その方は元消防団員で、震災当時も消防車に乗り閑上地区で避難を呼びかけていたそうだ。そんな中、目の前に大きな津波が押し寄せるのを見て、Uターンして避難をすることにした。その際、津波がきている

のを知らせるためにサイレンを鳴らしていたため、家の中にいた人々がそれを聞いて道路に出てきた。そこでその方は判断に迫られた。そして自分と隣にいた同僚の命を守る決断をした。そこには教官からの「自分の命を守らなければ救助活動をするにはできない」という教えがあったのだそうだ。何かできたのではないか、救えたのではないかという後悔に苛まれ、しばらくは塞ぎ込んでしまったそうだが、現在は伝承館で震災について伝える活動をしてくださっている。それでも今になっても当時のことを考えてしまうとおっしゃっていた。

実はこのお話は今回初めて聴いたのだ。昨年はこの話をしてはいなかった。この1年でなにか心境に変化があったのかもしれない。ここで、事前にテレビでみて心に残っていた言葉を思い出した。「15年が経つ中で心境に変化があった。」語り部として活動してくださっている方々は被災者だ。きっといろいろなものを乗り越えてこの場に立っているのだろうと感じた。けれど、きっとまだ乗り越えられていないものや、もう乗り越えることのできないものもあるだろう。時間の経過の中で被災者の方々が感じていることは変わって行って、でもその中にはずっと変わらない強い想いもあって…。そんな強い想いが語り部としての活動を続けさせているのかもしれない。ただこれはあくまで私の想像でしかない。語り部の方のお話はあまりにも壮絶で、私は直接その心境について尋ねることはできなかった。

最後に山元町震災遺構中浜小学校で感じたことについてだ。

中浜小学校の中には、震災前の街の様子ジオラマが展示されていた。一件一件の家にはそこに住んでいた人の名前が書いてあった。このような展示は名取市震災復興伝承館にもあったのだが、中浜小学校の周辺は震災後に人が住むことができない地域となったために、より伝わるものがあった。それは、ここに人々が生活していた証が残されているということだ。どれだけ様子が変わってしまったとしても、過去に人々が暮らしていて、生活があったことに変わりはない。そんな地域の人々の想いが体現されていると感じた。

また、語り部の方が、この中浜小学校を震災遺構にするのに4億7000万円かかったとおっしゃっていた。そこで改めて、震災遺構として残していくことの難しさを感じた。莫大な資金が必要であり、また、捉え方によっては震災の惨さを想起させるものにもなりうる。そんな中でも震災遺構として遺そうと決断した地域住民の方々の想いや意志を私たちは受け取らなくてはならない。

ここまで巡検で訪れたそれぞれの場所で人々の想いについて感じたこと、考えたことについて書いてきた。最後に、まとめとして巡検全体を通して感じたことについて2つの視点から述べたいと思う。

まずは生徒会執行部防災班のチーフとしての視点から。

この被災地巡検は生徒会執行部員の防災意識を大きく変えることができる唯一の機会だと私は思っている。そして今回、私はチーフとして巡検に参加した全員の意識が変わることを望んでいた。結果としてそれは達成できたように思う。全日程を終え、帰りのバスでひとりひとりが感想を話す場面でそれを実感することができた。もちろん去年の私と同様に興味本位で参加した人もいると思うし、私はそれはむしろいいことだと思っている。災害について、防災の大切さについて、それらを伝えることは本当に難しい。だからこそこういった機会が必要だと思う。これをきっかけとして防災班内でも周囲の防災についてより深く考えることができるようになるだろう。また、それと同時に生徒会執行部内でも防災への意識や関心が深まることを望んでいる。

防災班のチーフとして活動できるのも残りわずかだ。この限られた期間の中でも私は明訓の防災のためにできることをしたい。そして嬉しいことに今回の巡検でこの想いが後輩にも受け継がれていることが改めてわかった。これからも明訓で悲劇を起こさないための取り組みを続けていって欲しいと願っている。

最後に私個人の視点から。

まず、2度目の被災地巡検に行き本当によかったと思っている。去年の巡検では感じ取ることができなかった人々の想いに気づくことができた。1度行ったきりではわからなかっただろう。このような貴重な経験を2度もできたことは感謝してもきれない。巡検を通して私の震災・防災に対する意識や価値観は180度変わった。被災地はただ悲しい場所ではない。もちろん震災という悲しい過去をもっているが、それ以前に人々の生活、文化、歴史があったありふれた町だった。そしてそれだけではない。これから生きる私たちに大切なことを教えてくれる、そんな未来を拓く場所でもあるのだ。巡検を通しての経験は、こんな素晴らしい気づきを私に与えてくれたのだ。

今回の巡検で感じたことは、人の想いが被災地を動かしているということだ。多くの震災遺構に共通しているのは、震災前の普通のありふれた日常の写真が展示されているということだ。そこで暮らしていた人々にとって、そこは被災地ではなかった。震災後の変わり果てた姿を見て、私には想像ができないほどの辛さを感じたのだろう。

だからこそ、語り部として活動している方がいたり、建物が震災遺構として残っていたり、それらが全て当たり前なことだと思ってはならない。震災について、住んでいる地域について、向き合い続けたうえで人々が出した答えだ。きっと簡単に辿り着いた答えではなかった

だろう。それでも顔も知らない誰かの悲しみを生まないためにと伝えてくれているのだ。復興が続く被災地の「今」は、そんな想いが繋がって実現したものだ。その裏にどれほどの犠牲があって、悲しみがあって、覚悟があったのかを私たちは知ることができない。でも想像することはできる。想像したうえで、伝えてもらったことを私たちがどう次に繋げていくのかを考えなくてはならない。

では私には何ができるのだろうか。それは忘れないこと、そして周りの人に伝えることだと思う。自分と自分の大切な人の命を守ることができるのは自分自身なのだ。震災や防災について伝えるのは本当に難しい。それでも生きて欲しいと思う大切な人が自分の周りにいる限りは伝え続けなくてはならない。

私はこれからも自分で被災地を訪れたいと思っている。どれだけ人々の想いが変わろうとも、被災した方々の想いがずっとそこにあることは変わらないだろう。被災地の復興は、普段は目視することのできない被災者の方々の想いが、目に見える形となって表れているものと、今回の巡検で感じることができた。だから私は復興していく町の様子を自分の目で見ていたいと思う。人々の想いが形になっていく様子を見ていたいと、そう強く思うのだ。